

一村一品一人一研究

一村一品と聞くと、私はすぐ「一人一研究」を連想する。一人一研究とは、昭和初期、恩師下村湖人らが軍部から排除されるまでの、日本の青年指導の眼目の一つである。湖人は、青年一人ひとりが身辺や地域に一つの研究課題をもつことの重要さに着目したのである。

国東の旧熊毛村の前田望青年も、昭和七年にタコつば縄繰揚機を発明し、一人一研究の成果として日本連合青年団最高の賞を受けている。前田青年は小学校を卒業すると、父の漁船を手伝うが、タコつば揚げの過酷な労働に驚き、その改善に取り組み。しかし、病気に倒れる。長い病床生活は構想をまとめる好機でもあった。炭鉱稼ぎで資金をためては試作を続け、数年後、実費を提供した友人の船に取り付ける。従来の三倍以上の労力の軽減と能率化で、次第に全船が使用するようになる。

父の過労に心を痛め、病を好機に転じ、友情に助けられ、郡教育会も支援するなど、逆境の中を、周囲の機縁きえんに従いつつ、巧たくまずして自分と自分の周囲を向上させている。

この見事な生き方には強く倫理性が脈打っている。

一村一品運動は息の長いものである。その成否は結局、消費者が決めることであるから。一品運動には倫理性が伴わねばならない。でないと消費者は見向きもしなくなる。

先日のテレビでまたも私は錯覚しそうになった。一村一品の新種花ニラは知事室で栽培されているような錯覚を。知事が一品のセールスマンとして陣頭に立つことはありがたい。しかし、そのことと、一村一品はまず県や知事室を通さねばならないといったこととは別のことであろう。まず初めに消費者あり、である。消費者こそ最高の宣伝媒体である。そのためにも一品運動には倫理性が漂っていなければならぬ。

(一九八八年七月二十二日)